ソウル市の意欲的な青年対策を学ぶ

韓国視察調査記 その１

５月 15 日から 17 日まで、ソウル市の学校給食と青年支援策の調査と視察のために韓国に行ってきました。１日目は、青年センターとハジャセンターの視察、２日目は教育庁と流通センターの視察、最終日には西大門刑務所と景福宮を見学し、帰国。タイトな日程でしたが、とても勉強になりました。盛りだくさんの視察調査を２回の連載でお伝えします。

青年センターでの聞き取り

「青年しあわせプロジェクト」に約七〇〇〇億円の予算化

厳しい競争社会の中で、学費も住宅費も高く、青年が自分の未来への展望も持ちにくく社会に希望が持てないという点で、日本と韓国はよく似ています。

韓国の青年の五人に一人がソウル市に集中していますが、この一年の間に燃え尽き症候群を経験した若者は三割を超し、引きこもりも増えています。

就職が難しく、家賃も高いため未婚の一人暮らしもほかの地域より多く、孤立してしまいがちだという背景があります。

このような状況に対してソウル市は二〇二〇年に二〇事業七一三六億ウオン（約七八五億円）だった「ソウル型青年保障」予算を「青年しあわせプロジェクト」として五〇事業六兆二八一一億ウオン（約六九〇九億円）まで拡充しようとしています。

①働く場、②住居、③教育と文化、④福祉と生活、⑤参加と権利という五つの部門から様々な施策を展開しようとしていることが注目されます。

「青年安心住宅」や「青年手当」など

具体的には未就職の青年のための「就学士官学校」や、最大一年間の家賃助成、通常の家賃より三割から七割安い家賃で入れる「青年安心住宅」、仕事をしていない青年には、月額五万円程度の「青年手当」が最大六か月支給される、など青年をささえるさまざまな制度がつくられています。

特徴的なのはどのような政策が必要なのかを青年が話し合う「青年政策ネットワーク」でさまざまな分科会ごとに政策提案や政策モニタリングが行われていることです。

地域ごとに「青年センター」が十五あるソウル市

視察第一日目は仁川空港から空港鉄道でソウル駅に向い、通訳兼ガイドの方と合流して青年センターに直行しました。

青年センターはソウル市内に十五の地域センターがあり、私たちが伺ったセンターはそれらの拠点施設です。

センターには青年たちのさまざまな要求にこたえ、音楽スタジオやキッチン、ＳＮＳ配信の個別ブースや相談室などが充実していました。

ハジャセンター音楽スタジオ

石原都政が水元青年の家など都内の青年の家を全廃したままの東京とは対称的だと思いました。

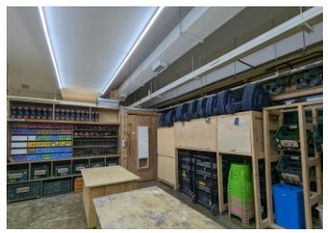
「ハジャセンター」（やってみようセンター）にもびっくり

続いて訪れたハジャセンター（日本語に訳すと「やってみようセンター」という意味）は「自分が望む未来を自分で作っていく空間」として位置づけられていて、通常の学校をやめている十六歳から十八歳の子どもたちが主に利用しています。また、高校の三年間のうち、一年間をここで学び元の高校に戻ることもできます。

ヒップホップで有名なミュージシャンや、私が夢中になった「ウ・ヨンウ弁護士は天才肌」というドラマの脚本家もこのハジャセンターの出身だと聞いてびっくりしました。

クラブ（ディスコ）、木工室、美術室、勉強室やカフェなどを見せていただきました。

プロジェクターによるセンターの紹介の最後に人間の価値や尊厳を「役に立つかどうか」で診断することが正しいのか、と問いかけていたことがとても印象に残りました。



ハジャセンター木工作業室

日本共産党 都議会議員
和泉なおみ の
さわやかレポート
発行　和泉なおみ事務所
葛飾区東立石 3-25-8
TEL 5671-0850
FAX 5671-0851

NO.92
2024.5